

くじら日記

太地町立博物館から



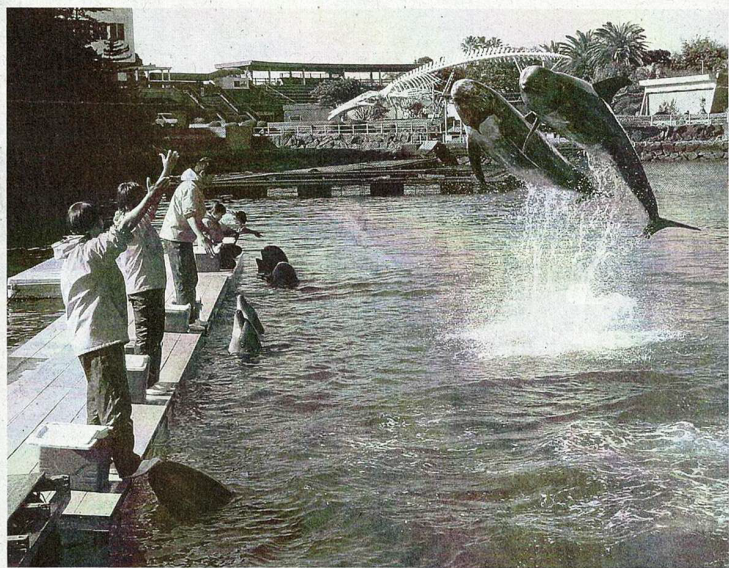
2004(平成16)年8月、三軒一高氏が太地町長に就任しました。三軒氏は、くじらの博物館の発案者であり町長であった故庄司五郎氏のおいにあたる人物で、庄司氏の志を受け継いだ一人でした。

就任時には「過去・現在・未来くじらに関わり続けていく」と宣言し、将来的に町全体を「くじらの学術研究都市」にしていく計画を掲げました。さらに三軒氏は「くじらの博物館の発展なくして、くじらの学術研究都市の実現は成しえない」との考えを口にしました。

それから3カ月後、くじらの博物館の館長に抜擢されたのが、開館時から最後の職員で、現在は顧問の林克紀氏でした。

林氏はある著書の取材で当時のことをこう振り返っています。「庄司町長が亡くなっ

鯨類飼育の変遷⑨



専門学校で鯨類の飼育やトレーニングを学んだ飼育員らによるショー (平成19年撮影)

た後、情熱も進歩もなく、なんとなく続けてしまった。庄司町長が描いた夢が途切れてしまっていました。でも、『捕るか護るか? くじらの問 (中略) くじらの博物館を見

博物館の価値、進むべき道

題』)。まず着手されたのが、組織の見直しでした。鯨類飼育においては、海洋動物やトレーニングなどを専門学校で学んできた20代の飼育員らを集め、その統括と技術指導のために、千葉県の鴨川シーワールドのベテラン飼育員を招聘しました。また、獣医師を新たに1人雇用し、医療体制を強化しました。そして筆者もこの時機に、東京海洋大学鯨類学研究室を卒業し、飼育鯨類担当学芸員として飼育職に就くことになったのです。専門性をもった人材を広く町外から採用し、専従させる人事は過去にはなかったと言います。

2007(平成19)年5月、新たな体制となった鯨類飼育のスタッフらで、「勉強会」が開かれました。内容はCS推進(顧客満足度の向上を目指す活動)で、「くじら

の博物館が提供できる価値は何か」を問いかけるものでした。スタッフらは幾日かかけて「①世界一の鯨をテーマにした博物館、②くじらの町太地にある鯨の博物館という位置づけ、③多彩な飼育鯨種、④お客様と動物の距離が近い、⑤お客様とスタッフの距離が近い、⑥風光明媚な吉野熊野国立公園の中にある、自然の景観を生かした飼育展示施設となっている、⑦捕鯨の歴史と生きている鯨を共に学べる希少価値」などと価値を見いだしたのです。

開館から約40年がたち、鯨類飼育のスタッフらはくじらの博物館の「強み」と「役割」を再確認するとともに、鯨類の飼育を通してこれから何ができるのか、進むべき道を明確にしたのでした。

(太地町立くじらの博物館 館長 稲森大樹)